平成二十八年一月投句　【太宰府】

雪が縫ふ旧街道の松並木
而してごみを漁るや初鴉　勝利
燃え尽きるまで真っ直ぐに破魔矢かな

強風にどんどの山を小さくし
打ち鳴らす子等の太鼓やどんど焼き　佳与子
草原の石の温みや日向ぼこ

雪片となり我が庭を横飛びに
よそいきの声で笑って初電話　節子
新装の町家博多の能始

本職は郵便局長山始
先がけて咲く飛梅の白さかな　光子
よく話し食べては笑ひ女正月

幣白き手斧掲げ禰宜山始
見渡せる筑紫あまねく冬霞　真理子
飛梅も咲いて宰府の人出かな

初雪や深川飯に湯気の立ち
拝受せし御朱印七つ福詣　由紀子
飛梅の一輪に足る一日かな

平成二十八年二月投句　【櫛田神社（節分）】

空を向く凍蝶の眼の碧さかな　勝利

身に巣くふ病と共に春を待つ　光子

鶯に一瞬消えて沢の音

掛け持ちのにわか芸者や節分会　佳与子

カメラマン片手でキャッチ年の豆　真理子

祝唄調子はずれの節分会

午祭直会にまで長居して　由紀子

恵方巻門前に売る節分会　節子

山茱萸の花のまわりで畑仕事

縫ひかけの着物を膝に春を待つ

木々ごとの木札新し梅とあり

ふるさとに似て雪道の楽しかり

マスクして禰宜休憩の社務所裏

利休梅竹の添え木に芽を吹きて

遊具みなペンキぬられて下萌ゆる

本郷の坂の四辻にある余寒

熱の児に添い寝する夜の雪しまく

飛んで来し紅白の餅節分会

平成二十八年三月投句　【太宰府（曲水の宴）】

水底に光を揺らし春の風
日時計の三時のところ下萠ゆる　勝利
むき出しの櫓の太し春炬燵

曲水の盃に遅速のありにけり
屈まねば通れぬ梅の一樹かな　佳与子
くぐる度梅の下枝に触れてをり

曲水に沿うて敷かれし緋毛氈
曲水の宴に二人の衛士も立ち　節子
図書館へミモザの花を見るコース

筑波嶺に木の芽風吹く頃に会ひ
命日もはや夕暮れて春炬燵　光子
手に持つは宰府の梅や巫女の舞

曲水の盃引き寄せる竹を手に
白拍子梅がくれなる舞台かな　真理子
雑木山ささやき交わす木の芽風

金泥の絵より始まる雛展
雛展津波に耐えし雛も置き　由紀子
見上ぐること多き都心の陽炎へる

平成二十八年四月投句　【グリーンパーク　若松】

馬を吸ひ素知らぬ虻の眼の緑
石楠花や蕾に初めし紅のひび　勝利
別れ来て蹴れば重たき花屑の

哺乳瓶くわえ眠る子花の下
場所取りのロープをゆらす花の風　佳与子
花御堂作法を僧に訊きもして

地震に揺れながら春夜の警報を
窓震え家軋む地震春の夜　節子
受話器手に校歌を歌ふ新入生

金鳳華咲く野くづほれ地震つゞく
通院の合間の今日を野に遊び　光子
図書館の係居眠り日永かな

鶯や丘に小人の街展け
地震に関わることもなく春の星　真理子
葱坊主地震の余震の収まらず

草を食む山羊の鬚先春の泥
新宿の川に穴場のやうな花　由紀子
朧夜の町を一撃大地震

平成二十八年五月投句　【いのちのたび博物館】

風巻きぬ葉桜うねり獣めき　樟落葉恐竜展の外は雨

繭の中でまどろんでゐる白日夢　勝利　ジオラマの恐竜展示こどもの日　光子

渡る風を乾かすやうな麦の秋　落としもの探して薔薇の径戻り

飛び立てる鳥の一群走り梅雨　恐竜の化石見し目を新緑に

梅雨雲を巻き込むやうに観覧車　佳与子　観覧車卯の花腐つ日も回り　真理子

籬より吠ゆる子犬や鉄線花　麦秋の中ことごとく地震の村

薬用の十薬水で洗ひをり　マンモスの歯に触れし掌の梅雨湿る

降りそゝぐ初夏の太陽天窓に　節子　葉桜の川にせり出す天守閣　由紀子

野茨の咲く坂行くが近しとか　光色堂出で新緑に深呼吸

平成二十八年六月投句　【筥崎宮（紫陽花　菩提樹の花）】

片翅の羽蟻のあゆむ円ゆがめ　「唐船」の歌碑に静もる夏木立

はぐれ行く蛍の先に星赤く　勝利　色薄き夏萩風に咲き初めて　真理子

聴ひているはずの妹へと祭笛　ヒューズとび羽蟻の闇に瞬きぬ

蛍飛び始めましたと回覧板　涅槃絵の寺菩提樹の花満ちて

ダム底の村の記念碑梅雨に入る　節子　神紋の双葉葵や天下祭　由紀子

こんにゃくと寺に売られて夏みかん　高層ビル囲む神社の夏木立

雪抱く飯豊はるかに桐の花

豆二列植ゑてはじまる朝かな　光子　【お休み】　佳与子

門々に紫陽花咲かせ社家の町

平成二十八年七月投句

夏祭いつもは見せぬ兄の眉　勝利

萍を押しのけ稲株太りゆく

花莫蓙の天女とともに昼寝かな

日盛りの鳩電線の一本に　節子

じじと鳴く蝉鵯に捕らえられ

薬塗る夫の大きな汗疹の背

始発出て山あぢさゐの夜明け色　光子

白南風や米寿祝ぐ旅つつがなく

白扇の文字のやさしく形見なる

斑猫のくるりと誘ふ山稲荷　真理子

齢百超えてなほ山笠追ふ男

ベランダに育つ野菜や月涼し

入谷へと朝顔市へと早出して　由紀子

梅雨雲の垂れ込む寺の雲竜図

羽化すでにし終りし蝉翅濡れて

【お休み】　佳与子

平成二十八年八月投句　【博多駅　阪急デパート屋上】

縁者らの宴を離れ盆の月
脚開き過ぎて暑さや茄子の馬　勝利
ナイフより小さな鱚を捌きをり

稲妻や遠くを見ることなく暮らし
戒めの言葉を額に盆の月　光子
供華のごと咲きし大樹の百日紅

稲妻の中を鴉の水平に
土塊を土笛に子ら夏休み　真理子
七夕の母体に育つ第四子

炎天を来て炎天の屋上へ
百日紅延命地蔵はその奥に　由紀子
透明な屋根に水輪や白雨来る

【お休み】　佳与子、節子

平成二十八年九月投句　【皿倉山】

姉なのか母なのか問ひ浴衣連れ　霧湧きて相思鳥語る如く鳴き

てらてらと日差を歪め穴まどひ　勝利　穂芒や気流に任せ飛ぶ鴉　真理子

雲迅し来る颱風は明日未明　鳴き止めば躓く心地鉦叩

お団子の出るかも知れぬ月を待つ　老眼鏡借り糸通す鰯雲

キャンパスに元寇跡地草の花　節子　三食を作る暮しや草の花　由紀子

山小屋の夜や四方より轡虫　亀石の首向く先の葉月潮

元寇の防塁今に草の花

住み馴れし町を眼下に野路の秋　光子　【お休み】　佳与子

十五夜の真夜にやうやう雲間より

平成二十八年十月投句　【住吉神社（子供相撲　流鏑馬）】

痩身のピエロが銜え紅鬼灯　　子猫ゐる神饌田なりけり稲穂垂れ

木犀の香に惑ひつつ祝詞かな　　勝利　　秋祭馬を促す馬のゐて　　真理子

草の花寄つて来るものみな小さき　　のけ反りて狸とも穴熊かとも

田を前にケーキ屋二軒稲雀　　細き子の勝ちに歓声宮相撲

校名を部屋の名にして宮相撲　　節子　　鵜の潜る潮入川に秋の風　　由紀子

半纏に鏑の一字秋祭　　磨崖仏御簾のごとくに霧下りぬ

流鏑馬の馬道にかかり初紅葉

龍笛の調べは雨に秋の宮　　光子　　【お休み】　　佳与子

雨音の高まるばかり秋の宮

平成二十八年十一月投句　【春日公園　白水公園】

コンテナに向かふクレーン鷲のごと　仕事場の小さな鏡木の葉髪

竹ぼうき聞こえる奥へ紅葉路地　勝利

猪罠を確かめに入る山猟師　真理子

槌の音す風除の杭打ちをるや

落葉掃く我に月掃く欅かな

かたまりて庭師休憩初時雨

相寄ると思へば交差鴨の水脈

石人に守られる墓冬紅葉　節子

落葉掻土の匂ひも掻きあげて　由紀子

古墳へと低き生垣お茶の花

粧ひし山より赤き月昇る

立冬の午後四時の陽の東京に

なつかしき人訪ふ秋の石榴坂　光子

【お休み】　佳与子

道迷ふまた山茶花の花に出て

平成二十八年十二月投句

冬木立大切な人ふいに消え　　かの人の呼ぶ虎落笛風の音

人去りしを知りたくなくて着ぶくれて　　勝利　　カーテンにしがみて潜む冬の蜂　　真理子

皿倉山（さらくら）の上に見つけし冬の星　　犬匂ひ嗅ぎて丸める古毛布

濁点の如くビーナス冬の月　　ぽっかりと空席のまま年暮るる

橋くぐり飛びし一羽や尉鶲　　節子　　係留の鵜舟冬日の筑後川　　由紀子

注連作募集の市政だよりかな　　弟に絵本読む児へ毛布掛く

無人駅となり久しく冬ざれて

小春日や少しの恙良しとして　　光子

約束の時に間のあり冬ぬくし